

中学校3学年国語科学習指導案

日時：令和7年9月30日（火）

場所：3年B組教室

学習者：3年B組（35名）

授業者：稻田知陽研究生（印）

（指導教諭 加儀修哉教諭）

1、単元名 シン・言葉をつかむ

（「作られた「物語」を超えて」（光村図書『国語3』））

2、単元設定について

（1）育てたい能力に関する生徒の実態と目指す方向【生徒観】

現代社会は多様化が進み、共生社会が形成されつつある。B組の生徒は、共生社会を生きる中で様々な立場の人を受け入れたり、英語などの言語を使用して交流をしたりしようとする能力は高いものの、多様な立場の人に寄り添うまでには至らなかったり、自ら進んで視野を広げることには抵抗感があったりするように見受けられる。また、グループ活動では意見が出やすいものの、クラス全体での発言量は少ない。本単元を通して、視野を広げ、自らの意見を醸成する能力を育てる。同時に、言葉についても感覚を鋭くし、その功罪や使用する語の選択にも意識的になるような姿勢を養いたい。また、グループワークを随所に取り入れることによって、意見交流によって考えを深めたり、多角的な視点を養ったりすることを目指す。

（2）教材の捉え方/教材化にあたって【教材観】

・教材文の分析

本教材の特徴は、堅固なようでいて危うさを持つ言葉の二面性に気づかせるため、筆者が用意した具体例ゴリラの記述が魅力的であること、そして、そこからの一般化が実にスムーズであることだろう。本論の前半で語られる40年余りアフリカに通いながらジャングルでゴリラと生活してきた筆者の体験談は、作りものではないおもしろさがあり、思わず文章に引き込まれる。「物語」というキーワードを示すことで、人間の一方的な誤解により命を奪われたり劣悪な環境に閉じ込められたりしてきたゴリラの運命に対する悲哀と怒りが、決して過去の人間達の罪に留まらないことを知った読者の感情が大きく揺さぶられる。ゴリラという具体化によって、本編後半で展開される主張への一般化、抽象化が鮮やかである。人間は言葉を発明し知性を発達させてきた、言葉は情報伝達のために必要不可欠なものであり、人間が自分の気持ちを伝える信頼できるコミュニケーション手段である、という無意識の思い込みに疑問を抱かせ、新たな視座を提示するという論理展開が円滑であることである。どんなに客観的な説明や描写を心がけたとしても、人間は自分の受けた印象に影響され間違う危険性がある。言葉は万能であるからこそ万能でないことを、読者に自分で気づかせる、その論の流れが見事である。

言葉については、筆者は次のようにも語っている。「言葉の効用はまず『見えないもの』を聴覚に移し替えて視覚に再現し、隠されていることを知ろうという欲望を引き起こしたことである。言葉には重さがないから、どこにでも持ち運びできる。遠くにあって見えないこと、過去に起こって体験できなかったことを、言葉で再現してまるで見たことのように感じさせることができる。まさに、言葉は時空を自在に飛び越える力を持っているのである。／言葉のもうひとつの能力は、世界を切り分けて、カテゴリーに分類する力である。空と大地に、海と岸に分けて、そこに境界を引く。植物を根と幹と枝に分け、実と葉とを分類し、用途を付与する。もちろん、サルや類人猿だってそれらの区別はできる。しかし、言葉で命名することによってその違いは鮮明になり、それぞれに意味を持たせることができるのだ。たとえば、昨日と今日の空は違う。昨日は一日中太陽が

照っていたが、今日は朝から曇っていていざれ雨が来るだろう。そして川は増水して渡れなくなる。同じ空でも様子の違いが次に起こることを予感させる。言葉はひとつひとつの出来事に意味を付与してつなぎ合わせ、物語にして仲間と共有させる。おかげで私たちは自分が経験していない過去の出来事を、仲間の言葉から学ぶことができるのだ。」⁽²⁾一度「物語」の危険性に気づいた読者は、この文章から言葉の功罪両方を読み取ることができるだろう。

（1）山極寿一『森の声、ゴリラの目 人類の本質を未来へつなぐ』二〇二四年二月六日 小学館新書

・教材化の分析

本教材は「言葉」や、「言葉」から作られる「物語」を盲目的に信じることの危うさを論じており、そのテーマは、世の中を批判的な視点で観察する視点を養ったり、「言葉」を醸成したりすることが求められる中学生に適した教材である。また筆者は主張を伝えるために、具体と抽象や原因と結果など論理の展開に工夫を凝らしている。明快な論旨が特徴であるため、原因と結果、意見と根拠、具体と抽象などの関係に着目して、論理の展開を捉えたり、論理の展開に説得力を持たせるための工夫を見つけ出したりすることに適している。

3、単元の目標

「筆者の主張や論理の展開について、具体と抽象の関係を学ぶことを通して、論理の展開に説得力を持たせる文章を書くための力を育む。」

4、本単元における言語活動

本単元においては、第4時、第5時に山極寿一の著作を読み、考えを広げる活動や、その主張をもとに意見文を書く活動を行う。これらの活動を通して、考えを深化させる力や自らの思いを表す言葉を精査する力、具体・抽象を実際に運用する力を磨く。

5、単元の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めようとしている。(情報(2)ア)	①文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えようとしている。(C(1)ア) ②文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見を持とうとしている。(C(1)オ)	①進んで文章の構成や筆者の問題意識について捉えようとしている。 ②文章を読んで得た学びを自らの生活や文章に活かそうとしている。

6、単元の全体計画(全5時)

次	時	ねらいと学習内容	○指導上の留意点 ☆評価規準・評価方法等
一 次	1時	【ねらい】本文全体の内容を理解し、筆者の問題意識や、論理の展開の枠組みを捉える。 【内容】範読を聞く。筆者の問題意識を捉え、本文の構成を確認する。序論、本論、結論を班ごとに話し合い、分ける。	○写真、動画などの資料を効果的に用いて、生徒の関心を高める。 ☆(主①)進んで文章の構成や筆者の問題意識について捉えようとしている。(ワークシート、発言、見取り)

	2時	<p>【ねらい】論理の展開の大枠を捉える。</p> <p>【内容】具体と抽象の関係について、班ごとに内容を読み取り図示する。</p>	<p>○具体と抽象について、図式化して視覚的に示す。</p> <p>○論理の展開を踏まえ、筆者の主張を捉えるように促す。</p> <p>☆（知・技①）具体と抽象など情報と情報との関係について理解を深めようとしている。（ワークシート、発言）</p> <p>☆（思・判・表①）文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えようとしている。（ワークシート、発言、見取り）</p>
	3時	<p>【ねらい】論理の展開をまとめ、筆者の主張を捉える。</p> <p>【内容】筆者は「物語」を超えて真実を知るためにどうすべきだと主張しているか、筆者の主張を捉える。</p>	<p>☆（思・判・表①）文章の種類を踏まえて、論理や物語の展開の仕方などを捉えようとしている。（ワークシート、発言、見取り）</p>
二 次	4時	<p>【ねらい】筆者の他の著作を読んだり、現代に見られる「物語」を考えたりしながら、筆者の著作を読み、意見文の骨子をつくる。</p> <p>【内容】筆者の他の著作を読み、その感想や印象に残った言葉から、意見文の骨子をつくる。考えがまとまった人は意見文を書き始める。</p>	<p>○筆者の主張から、自らの主張を醸成することができるよう支援する。</p> <p>○文章を読む抵抗感をなくすため、交流の活動を行う。</p> <p>☆（思・判・表②）文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見を持とうとしている。（成果物、見取り）</p>
	5時	<p>【ねらい】筆者の主張について、単元で学んだ文章の工夫を活かして自らの意見をまとめる。</p> <p>【内容】筆者の主張について考え、自らの主張を述べる意見文を書く。筆者の言説や、筆者が執筆した本に触れる機会をつくる。</p>	<p>○構成シートをもとに書くができるよう準備をする。</p> <p>☆（主②）文章を読んで得た学びを自らの生活や文章に活かそうとしている。（成果物、見取り）</p>

7、本時の学習

（1）本時のねらい

筆者の他の著作を読み、自らの主張を考えながら、意見文の骨組みを作る。

（2）本時の展開（4/5時）

	指導事項	学習活動（◆反応予想）	指導上の留意点 ●留意点○手立て☆評価
導入 5分	1) 前回の振り返り	<p>1) 前回の学びについて振り返る。</p> <p>◆具体と抽象の関係を確認した。</p> <p>◆言葉の選択には筆者の意図があった。</p> <p>◆序論、本論、結論には、それぞれ話題提示、具体例、主張（まとめ）などの役割があった。</p>	

	2) 本時の確認	2) 本時の進め方を確認する。	
展開1 25分	1) 考えを広げる。	<p>1) 筆者の主張に基づく意見文を書くために、筆者の他の著作にふれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ジグソー法を用いて、山極氏が執筆した3冊から引用した文章を読む。 (書かれている内容、筆者の主張) ・『スマホを捨てたい子どもたち 野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』p.64-67,p.147-152 ・『京大式 おもろい勉強法』p.131-132,p.137-141 ・『ゴリラからの警告「人間社会、ここがおかしい」』p.14-17,p.69-72 <p>2) ホームの班で共有する。</p> <p>◆『京大式 おもろい勉強法』では、音楽や所有について話されていた。筆者は、言葉よりも音楽のほうが心と心を結びつけ、身体と身体を結びつける力を持っていることや、「自分たちの利益を守るために」という文言しか育たない精神の問題があることについて主張している。</p>	<p>○B4用紙に印刷したものを配布し、生徒が手元で見ることができるようする。</p> <p>●教師が山極氏の著作から3冊選定したものから、それぞれまとまった2つの文章を提示する。</p> <p>●それぞれの班の人数がおおむね同数になるように調整する。</p> <p>●前時の筆者の主張の要約を行った経験を活かし、要約を行うように周知する。</p>
展開II 18分	2) 意見文を書く準備をする。	<p>1) 意見文を書くときの周囲点を聞く。</p> <p>◆具体と抽象を意識する。</p> <p>2) 山極の文章を読み、ワークシートに記入する。</p> <p>◆「どんな言葉巧みな演説も音楽にはかないません」という言葉が印象に残った。</p> <p>◆コミュニケーションは情報交換にとどまらず、心と心の触れ合いである。言葉のみがコミュニケーションの手段ではない。</p> <p>◆合唱の練習でも、クラスがまとまり、心が一つになったような感覚があった。</p> <p>3) 序論・本論・結論の構成や、具体と抽象、言葉の選択を意識しながら、400字程度の意見文を書く。</p>	<p>○文章を読むことが苦手な生徒については、読みやすいものを進めたり、教科書で書くことを認めたりする。</p> <p>○具体的な事例について、個別指導をしながら考えることを補助する。</p> <p>●ワークシートへの記入が終わった生徒については、個別に内容を確認する。</p> <p>●内容の確認が終わった生徒については、意見文を書く活動に移るよう伝える。</p> <p>●意見文については、ICT機器を用いても、原</p>

			稿用紙を用いても良いことを伝え、自分に合ったものを選択させる。
			☆（思・判・表②）文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見を持とうとしている。（成果物、見取り）
まとめ 2分	1) 本時の振り返り と次時の予告	1) 本時の学びを振り返り、次時の学習内容を知る。	○次時では、意見文を完成させ、交流する活動を行うことを伝え、次時への見通しを持たせる。

8、板書計画

作られた「物語」を超えて

山極寿一

本時の流れ

1. 班①で山極寿一の著作を読む。

2. 班②で読み取った内容を紹介する。（1分ずつ）

3. 意見文の骨子をつくる。
(ワークシート)

(4. 意見文を書く。)

※意見文を書くときの注意点

序論、本論、結論を意識する。

①「スマホを捨てた」子どもたち 野生に学ぶ

②「未知の時代」の生き方

③「京大式 もろい勉強法」

④「作られた「物語」を超えて」



ガボンのムカラバのキャンプ（中田義田文集）

自分のつけ方——精神的風習のすすめ
フォスターの言いつけを守らなかつた
「…」もそうですが、私は子どものころか
ら、自分が正しいと思うことを選んでいた
たまうだとは思います。でも、昔の人は
ほとんどそうだったのではないでしょ
うか。目の前にいる相手と、その場で付
け合つていた時代には、自分で判断し、自分が正しいと思うことを選ぶほかないのですから。
今なら、「ちょっとトイレに行つてきます」などと返事し、知り合いで、「今、こんな話し
合いをとっているんだけど、どう思つ？」と携帯電話で相談できるかもしれません。固定
電話しかない時代はそう簡単にはいきません。対面している場で話すことがすべて。私が
大学生のころもそうでした。その場でのけ合いが基本的には実現ったのです。

携帯が常にオンの状態の今の若者にも、本当は自分で決めておきたいことが山ほどあるはず
です。それなら、いつのまじめも迷込んで孤独になつてみてはどうでしょうか。携帯が常
にオンの状態ということは、人間関係が常にオンだということ。これでは孤独になりよう
がありません。孤独になるということは、何かに打ちのめされた状況をつくり出すことであ
る。孤独になれば、自分で責任を負うことができる。

もし誰かの助言を受けた失敗したしたら、自分で逃げ道をつくることになりかねませ
ん。これはあいつの意見であつて、自分のせいじゃない。と、でも、最終的に決定したの
はほかでもない自分ですから、責任を負うのも当然。自分でいいはず。携帯が常に
オンの状態というのは、そういうことをきちんと考る時間も生まれられないといふこと
となるのです。

ここで言う孤独とは、一人でご飯を食べるというような物理的な孤独ではなくて、自分
一人で物事を考える、携帯オフの状態で自分がだけの時間を持つという精神的な孤独のこと。
大事なのは、たくさん仲間がいても、何かを決定するときには自分で考めるということ
です。今の若者たちは、もしかしたら孤独にさせさせてもうまらないと思つてはいるかもしれません
ね。携帯電話のメールが来たら、すぐに返さなければ村八分される恐れだつてあるで
しょう。

思い切って携帯での離がりをえて断つたり、いったんあたら携帯をゼロにしたうえで、
自分で本当に大切な人間関係を築いていくことがでれれば、それにこしたことはあ
りません。でも、そのまことに携帯という手段に頼り切っていることもありて、自分を取
り巻く離がり見つめることが必要です。

自分が面白いと思ったこと、正しいと思ったことを、その場で自分で決定する。そのう
えで携帯を切った結果は結局は自分で自分で行つてたことですから、自信を持つて他人に
話せます。「自分」というものは、そうした積み重ねによってつくれるのだろうと思
うです。

それは誰かが感動をつくってくれるよりも、何倍も時間のかかるノロノロした歩みかも
しません。でも、どこかで自分の森となり、内となつてそれが未來の自分
を助けてくれる。

自分というものは自分のしてまたこのうえに感づつてはいるのですから、
過去を感化することもできなければ、過去を灰化することもできないということ。そ
ういう感化のまかたな自分というものに勝りを持つて相手に報しないと、対等な話はで
きない、ということなのでしょうね。

もちろん自己なんて、そう簡単につくものではありません。私も若いころには、物事が
思のようにならずにはじめたり……。今でも悩むは尽しません。それでもやっぱり我が道を行くよりほかないです。なぜなら自分というものは、そういうふうにしたが、つくれないものなのです。

情報化社会の行き着く先にあるディストビア

少し前までは、どこかでおせつかいおとなたち、あるいは、おせつかいな

年上の子どもたちが出てきて、情報がくらり、不安が解消されたりして
いたよう思います。弱い時期の子どもたちが社会から切り離されていかつ
たところが、ネットワーク社会となつた今、彼らをつなぎとめる社会の仕組
みがなくなりつつあります。

インターネット社会では、他者の目がしがらみや複数の暴力となつて個人に
のしかります。生身の人間としてつながる社会ではなく、点としてインター
ネットに浮かぶ存在となつたために、すべては個人に帰せられ、決断も個人に
丸投げされています。自己実現、自己責任が問われるのは、ネット社会ゆえで
しょう。世界に点としての自分しかなければ、他者に責任を預けるわけには
いきません。もちろん、誰かに責任転嫁することはできるかもしれませんのが、

通常はできません。だから孤独になつていく。

このまま進めば、社会は、自分の欲望だけを信じ、他人のことなどどうでも
いいという個人の衆合体になつてしまふ可能性があります。自分にとつての敵
を共同で排除するため、もしくは自分の利益になる存在だからつながる。他者

が付合つて、自分を守るために、生の世界を運営力で切り抜ける能力を
持つないといけません。そのためには、現実の世界と身体を使つたりアルな付
き合いをする必要があります。実際のフィジカルな接触でも、唐だけのやり取
りでも、気配を感じただけでもいい。インターネットで情報をやり取りして終
わりではなく、会つて、作業をともにして、相手の世界の中に入つて、ときに
ギクシャクしてみる。そうすると、いろいろな感情が芽生えます。相手に受け
入れられる、拒否される、裏切られる。こうしたことを繰り返して、人間と人
間が付合つて、自分を守ることなどは、こういうことなのだと学んでいく。

こうして自分の価値が單純なものではなく、さまざまに受け取られるもので
あることがわかつていくのです。自分を受け入れる友の、ちだけと付き合つて、
れば生きる意味がわかるかといふと、そうではありません。いろいろな人間関係
があるからこそ、自分が存続できます。人間は他者の評価によつてつらわれる
のです。だから、いろいろな自分をつくりつておかない、ある特定の個人が
自分を拒否、否定したら自分はなくなつてしまします。自分を支え、自分に期
待をしてくれる人がいろいろいるからこそ、どこかで信頼を失つても、どこか

で關係が崩れてしまつても、生きられるのです。

情報交換をするためのツールとして電話やメール、インターネットが登場し

たといつても、ひと昔前までは最初に人間の五感がありました。ところが、今
は生まれたときからインターネットのツールとしての世界があります。まずは
インターネットを通して世界を知り、次に生の経験をする。かつては順序が

報でつくられた世界です。それは本来、他者と共有できるものではないのに、

デジタル世代の子どもたちは、その構築された世界の中で見聞きする情報を互

いに交換している。自分で見た世界の情報を交換していた時代の人間とは違
います。

フィクションの世界での経験だけを積み重ねていると、振り返しも再現もす
きないリアルな世界とすり合わせることができなくなります。リアルな世界で
は、失敗しても前に戻れないし、傷つきます。なぜ、フィクションの世界の
ように自分の思い通りにいかないのが悩みます。そして、わけがわからなくなつ
て暴力を振つたり、泣き叫んだり、閉じこもつたりしてしまいます。

こんなではなかったと思う前に、生の世界を運営力で切り抜ける能力を
持つないといけません。そのためには、現実の世界と身体を使つたりアルな付
き合いをする必要があります。実際のフィジカルな接触でも、唐だけのやり取
りでも、気配を感じただけでもいい。インターネットで情報をやり取りして終
わりではなく、会つて、作業をともにして、相手の世界の中に入つて、ときに
ギクシャクしてみる。そうすると、いろいろな感情が芽生えます。相手に受け
入れられる、拒否される、裏切られる。こうしたことを繰り返して、人間と人
間が付合つて、自分を守ることなどは、こういうことなのだと学んでいく。

こうして自分の価値が單純なものではなく、さまざまに受け取られるもので
あることがわかつていくのです。自分を受け入れる友の、ちだけと付き合つて、
れば生きる意味がわかるかといふと、そうではありません。いろいろな人間関係
があるからこそ、自分が存続できます。人間は他者の評価によつてつらわれる
のです。だから、いろいろな自分をつくりつておかない、ある特定の個人が
自分を拒否、否定したら自分はなくなつてしまします。自分を支え、自分に期
待をしてくれる人がいろいろいるからこそ、どこかで信頼を失つても、どこか

で關係が崩れてしまつても、生きられるのです。

信頼関係で結ばれた共同体が機能しなくなつてはいるからでしょう。人間が信頼
し合つて、困つたら誰かが助けてくれるわけですから保険などかかる必
要はありません。個人が困つたときに誰も助けてくれない可能性があるから、
そ保険をかける必要が生まれているわけです。頼れるものが何もない中、個人
が取り残され、格差が増大する。それは、情報化社会の行き着くディストビア
です。

148

149

66 第2章 寄せてきて「自伝」を育てる

リアルな付合いでギクシャクしてみる

ぼくたちは、インターネットでつながった社会も言葉も、捨てることができます

。でも、ネットの中だけでつながっているのは危険です。インターネット

は、人間を情報化する装置であつて身体でつながることはできません。相手

はなりすましているかもしれないし、もしかしたら存在すらしていないかもし
れない。線になつたらすぐに消せる存在でもあるし、消される存在でもあります。

149

150

野生に学ぶ「未知の時代」の生き方

山極寿一著

二〇二〇年六月八日

	②①から生まれる、自分自身の意見（主張）を考えて書きましょう。	
③自分の意見を裏付ける具体的な事例や体験談などを考えて書きましょう。		

ワークシート () 組 () 番 ()

○山極の主張に基づく意見文を書くために、意見文の骨子をつくろう。

①印象に残った筆者（山極寿一）の言葉や、筆者の主張を書きましょう。

「シン・言葉をつかむ」意見文の手引き
 ○山極寿一の他の著作を読み、「作られた『物語』を超えて」から学んだ構成の工夫や言葉の選択を用いて、筆者の主張に基づく意見文を書く。

結論	本論	序論
筆者の主張など	具体的な説明 -事例 -問い合わせ -理由など	導入 話題提示・問題 提起など
私も山際寿一と同じく、コミュニケーションは単なる情報交換でなく、心の触れ合いであると考える。ぜひ中学生の豊かな感受性を言葉（＝左脳）だけでなく、音楽やスポーツ、ダンスなど（＝右脳）を仲間と一緒に体験することによって、さらに磨いていってほしい。	現在世田谷中学校で行われている芸術発表会の合唱練習を思い浮かべてほしい。ピアノの調べに乗って声を合わせて歌う、その時、我と彼の区別なくひとつエネルギー体に変身して、自分に気づく瞬間を体験していないか。言葉の壁をやすやすと越える音楽の力は、肉体に潜在する原始からの記憶を瞬間的にみがえらせる。その音やリズムの中で同じ方向を目指すのだから、まさに無敵の仲間意識に包まれると言えるだろう。事実、教育実習中の私にさえクラスの団結力が日に日に高まってくる様子を感じられる。	「どんなに言葉巧みな演説も音楽にはかないません。」と山際寿一は『京大式 おもろい勉強法』で述べている。音楽は、コミュニケーションツールとして言語より勝っているのだろうか。